講　　評

評価委員　　内　藤　寿七郎
（総合母子保健センター　愛育病院名誉院長）

家庭保健が家庭を構成する家族に極めて大きな影響を与えることは申すまでもない。殊に発育中の小児に対して父と母のそれぞれの望ましい働き掛けが行われるか否かは人間形成の基本形成時期である乳児，特に幼児期においては極めて重大なことである。

小児の身体発育においても情緒に加えられるストレスは好ましくない影響を及ぼすことが知られている。新生児からの精密な縦断的身体発育調査が行われているが，将来家庭保健の良否判定に役立つこととなろう。

未だ未知の分野の多い胎児の生活や発達に関する研究はその方法が至って難しい故に例数は少かったが今後例数を積み重ねて妊婦の生活指導に役立たせて欲しいものである。

家庭保健の小児への関わりの中で情緒の問題は，それが量的に測定し難いものである故に研究結果を短期間に結論づけることは難しいが，サーモグラフィを用いて情緒の変化を読み取る企てや，外国製コンピューター等電子工学を用いた研究など注目に値する。厚生省研究班で世界に先鞭をつけた，成人の声の違いによる新生児の反応をコンピューターを用いての描画装置等の研究も続けて欲しいものである。

家庭保健の乳幼児への影響の中で特に重要と思われるのは母親の働き掛けである。母の心身の健全如何によって小児の受ける心身発達への影響を見るのに，従来はゲージ中の猿の観察が多かったが猿の大集団の生活の中での観察は注目に値する。母猿が子猿を尻に敷いたり，足でおさえつけたり，授乳を拒否したりして我が児虐待をしていた報告は注目された。

人間においても双生児養育中の母親が定って片方の子を虐待した報告は双生児の育児と云う条件のもとで，恐らくは疲労の結果の所為かと思われ，家庭の中での母の精神の慢性の疲れは育児において特に好ましくないことであることを強く示唆するものと思われた。

自閉症についても，セロトニンと自閉症の関係を三年間継続した研究の結果として，セロトニンの適度の作用がその発生予防に必要だがそれには母親の適切なかかわり合いが重要であるとの発表があり，家庭において母の心の保健が小児の正しい心の成長に重要であることを示唆した。

幼小乳児の母の家庭外に仕事を持つ者が増加している現在，その慢性的な疲労がどのような影響を及ぼしているか今後の重要課題であろう。

他方少産時代は過保護によって発生する種々の問題が発生している。例えば消極性，持久力欠除，集中力のなさ，自発的行為の減少等々。これがそのままで成人しつつある。

出生率の改善対策が急がれるが，近い将来確実に来る稼働年齢層の減少に対応するには一人の成人が少しでも多くの能力を備える他はない。その為には今現在の小児を良好な家庭保健の中で育成させることが緊急重要な課題であり，本研究班に課せられた役割は極めて重大であろう。